会　　議　　録

第１１回定例会

開会　令和８年９月４日

教育委員会会議録

１　開　　会　　令和８年９月４日　午前１０時

２　閉　　会　　令和８年９月４日　午前１１時

３　教育委員会出席者

教育長	中川　斉史
委　員	島　　隆寛
委　員	横田　賢二
委　員	武田　國宏

４　教育長及び委員以外の出席者

教育改革統括監	眞椙　秀也
教育次長	遠藤　岳哉
教育創生課長	青木　秀夫
高校教育副課長	香美　昌浩
いじめ・不登校対策課長	福多　博史
教育政策課長	玉岡　あき子

［開　会］

教育長　　定例会を開会する旨を告げる。

［議　事］

教育長　　議案第４０号及び協議事項１を非公開として差し支えないかを各委員に諮る。

各委員　　異議なし。

教育長　　そのように取り計らうこととし、議事に入ることを告げる。

《報告事項１　第４回徳島県公立高等学校の在り方検討会議入試制度部会の概要について》

教育長　　報告を求める。

教育創生課長　内容等を報告する。

〈質 疑〉

島委員：ＤＡ方式と順次判定方式の違いは理解した。ＤＡ方式を導入する場合、６校程度まで志望校を記入することになるのか。シミュレーションにおいて、何校程度の志望校を書けばマッチングが成立するのか。

教育創生課長：現時点では十分なシミュレーションはできておらず、６校まで志望した場合に、どの程度マッチングし、募集人員が充足するかについては分からない部分がある。

島委員：調査書や学力検査の得点を用いて、志望校数が少ない場合や６校まで記入した場合に、どのような結果になるのかシミュレーションすればよいと思う。また、学力検査を１回とするのであれば、ＤＡ方式か順次判定方式のような仕組みが必要になると思う。複数回実施する方法も考えられるが、現時点ではどのような方向性を考えているのか。

教育創生課長：先日の入試制度部会でも、一般選抜における複数校での判定については、様々な課題があるとの意見があった。一方、生徒の主体的な選択という観点から、育成型選抜の枠を広げ、多様な能力を評価し、チャレンジできる機会を充実させてはどうかとの意見もあった。

島委員：育成型選抜の枠を広げ、残りを一般選抜とするイメージか。

教育創生課長：学校現場では、第１志望、第２志望と複数の志望を書いたとしても、生徒をできるだけ不合格にしたくないという思いもあり、慎重に検討する必要があるとの意見もあった。

島委員：通学区域制を廃止して生徒の選択肢を広げる一方で、高校入試で競争を避けるような仕組みにするということでよいのか。大学入試で初めて厳しい競争に直面することになるのではないか。他県では、中学入試から厳しい競争を経験している生徒もいる。高校入試における競争をどのように考えるのかという視点も必要ではないか。

教育創生課長：その点についても考えていく必要がある。

武田委員：育成型選抜を充実させる場合、どのような基準やテーマで生徒を選抜するのかという問題がある。また、育成型選抜の人数が多くなり過ぎることによって、学力の低下につながらないか懸念している。今年度の全国学力・学習状況調査の結果も芳しくない中、アドバンスト・エッセンシャルワーカーや理系人材を育成していく上でも、医学・薬学分野への進学などを含め、必要な学力をしっかりと担保する必要がある。長期的に見たときに、徳島県全体の学力水準が大きく低下することにならないか懸念している。育成型選抜を重視することで、学ぶ意欲が高まり、学力も高まるのであればよい。一方で、安易に育成型選抜の方へ流れることについては懸念がある。子供の数そのものが減少する中、高い学力を持ち、徳島県の高付加価値産業を支える人材を育てることも考える必要があり、育成型選抜の人数を増やし過ぎることには大きな課題があると思う。先日の総合教育会議でも、探究学習と学力との関係が議論されたが、どちらか一方を重視すればよいものではなく、双方を重視して初めて学力が高まるものだと思う。そうした中で、育成型選抜と一般選抜のバランスをどのように考えるのか。育成型選抜の人数を大きく増やしていくことには、長期的には賛成できない。

教育創生課長：具体的な割合については、これから議論していく段階であり、現行より育成型選抜の枠を広げた方がよいのではないかとの意見がある。現状はスポーツに偏っているという課題があり、部活動以外の分野も含め、多様な生徒が自らチャレンジできる機会にしていけないかという方向で議論している。他県でも同様の選抜の枠を広げている例があり、本県の検討が特に際立ったものではないと考えている。一方、学力については相当慎重に考える必要がある。本県では現在の育成型選抜で

も学力検査を課しており、学力検査を課していない県もある中、本県としては学力もしっかり見ていく必要があると認識している。今後、育成型選抜の評価方法や、どのような検査とするかについても検討が必要である。

武田委員：育成型選抜で学びを重視するのであれば、例えば理科や英語など、特定の教科を非常に高い水準で学んできた生徒についても、対象として考えられないか。

教育創生課長：そのような生徒についても、当然、対象として考えられる。

武田委員：高い学力や特定分野に突出した力を持つ生徒を育成型選抜で評価する枠があれば、その力を重点的に伸ばすことにつながる。スポーツや文化、芸術、情報なども含め、徳島県の産業を支えていくような突出した力を持つ生徒を育成型選抜で評価するのであれば賛成である。一方、文化、芸術、スポーツだけで育成型選抜の枠を設けると、進路指導の仕方によっては逃げ道になってしまう懸念もある。子供の数そのものが減少している中、安易な方向に進めば、徳島県の将来が心配である。

教育長：育成型選抜という名称のまま中身を大きく変えると、これまで定着してきたイメージとのずれが生じる。今回のように内容を大きく見直すのであれば、「育成」とは異なる名称への変更も検討する必要があるのではないか。

《報告事項２　令和８年３月県内高等学校卒業生の進路状況について》

教育長　　報告を求める。
高校教育課長　内容等を報告する。

〈質 疑〉

島委員：教育関係者等から、かつてと比較して県内高校から難関校などへ入りにくくなっているのではないかという声を聞く。子供の数の減少や優秀な生徒の医学部志向といった背景があり、また大学全入時代において進学率だけでは実質的な選抜状況が見えにくいため、徳島の公立高校の受験力を推し量り、外部へ適切に伝えるための目安が必要ではないか。

横田委員：就職率が１９．６％であることや、徳島県が「将来住みたくない県」の全国２位であるという現状に危機感を持っている。人口減少と若者の県外流出が重なれば、インフラ維持や公務員、民間企

業の担い手不足に直結するため、今後の教育の方向性について考える必要がある。

武田委員：四国４県の就職率の比較において、男子に比べて女子の就職率が低くなっている要因は何か。

高校教育課副課長：大学等へ進学を希望する者が多いと聞いており、大学進学率の上昇が影響しているのではないかと考えている。

武田委員：大学の進学状況で工学部（理系）が最も多いが、県内の理系人材確保に向けて、ネクストハイスクール等の取組を踏まえた数値目標は設けられているのか。

教育長：進路は生徒自身が選ぶものであるため、目標を設定してしまうと不適切な進路指導につながるおそれがある。

武田委員：多額の予算を伴う施策においては、成果や「出口」が見えるような目標を設定することが重要である。また、産業界と一体となり、生徒が徳島に居たいと思える魅力を県全体で作る必要がある。

島委員：ＡＩに代替される職業につく懸念がある中で、これまでの進路のあり方を変えていく必要がある。必要な情報を提示した上で、従来と同じ考え方で良いのかを周知していくべきである。

［非公開］

《議案第４０号 徳島県いじめ問題等対策審議会委員の任免について》

《協議事項１　令和８年度９月補正予算案について》

［閉　会］

教育長　　本日の議事が全て終了したので閉会する旨を告げる。

閉　会　　午前１１時